福岡市ボランティア・NPO登録 N0.354

—「倭国」を徹底して研究する—

九州古代史の会

事務局 福岡市西区泉 3-14-5 益田方
〒819-0381 TEL 092-805-1108
郵便振替口座 01750-5-12037

NEWS NO. 116

代表幹事 高橋勝明 副代表幹事 相良祐二

2004 7.18.

事務局長 益田哲男 編集担当 兼川晋

磐井の里と肥・筑の境を考える

五月十六日（日）見学会の報告

五月十六日（日）、「磐井の里と肥・筑の境を考える」見学会は、午前八時、天神日銀前出発。この日の見学会は雨天にも拘わらず川崎の高柴昭さん（メールマガジン kodai@ml-b05.itscom.net の主催者）の飛び入りもあり、小郡埋蔵文化財センターで待合わせた中村忠勝さんご夫妻を加えて総勢３３名の参加になりました。

○小郡埋蔵文化財センターでは杉本技師から小郡遺跡についてのミニレクチャー。山田寺式最古級の瓦が他市の企画展に貸し出されていたのが残念でした。

○御勢（みせ）大霊石神社では雨が降るので拝殿に招じあげられ、ご縁起を宮司さんから聞きました。その後、小郡官衙遺跡、上岩田遺跡を傘を差して見学しました。

○この地域は乙隈、横隈、山隈、今隈、小隈、篠隈など字名「隈」の氾濫から見て熊襲の勢力圏だったと考えれば肥の国といえます。御勢大霊石神社に仲哀戦死の伝承があるのも、ここがまだ筑紫でなかったことの証拠のようなものです。肥の国を有明海・不知火海の沿岸とするのは極く自然な見方でしょう。ところが、その肥の国を筑紫側から南下して分断した勢力が筑紫と改称、その筑紫が広域なので筑前、筑後と分けて呼ぶことにした、それが奈良の律令制下だとしても、もともとの肥の国を筑紫と呼ぶことにしたのはいつ頃のことでしょうか。これは宿題です。

○肥前の柚比遺跡で代表的な剣塚古墳を見て、千栗神社へ。ここが淀姫神社とともに肥前一宮と呼ばれた理由は何だったのか。そんなことを考えながら、展望台から眼下を流れる昔の筑後川の蛇行跡を眺めてみました。肥・筑の境界は人為的な勢力の拡張で変えられる外にも自然の水流による変化によっても影響されるので一層複雑になります。

○筑後国府と国庁跡は埋め戻されていましたが、遺構配置図を片手に説明を聞けば、何で筑後の国府が日本最古で、最大規模で、最長五百年も継続し、三度も移動しているのか、納得のいく説明が聞きたくなります。これはおそらく、『隋書』倭国の多利思北弧と関連して説明しなければ収まらないでしょう。味清水御井神社も見学しました。

○石人山古墳館と古墳では、五世紀前半に突然完成された形で出現した前方後円墳の不思議さ。岩戸山古墳館と古墳では、なぜ、この古墳を岩戸山と呼ぶのか松延さんに直接説明していただきました。名前の元になった岩戸は筑後川の淵に沈んでいるそうです。

卑弥呼は天照大神でなかった

六月十三日（日）例会・総会の報告

六月十三日（日）午後一時半から早良市民センター3Fで開かれた例会は、松中幹事が安本美典氏の卑弥呼＝天照大神説を正面から取り上げての批判でした。その後、第十五回定例総会が開かれました。

○安本美典の卑弥呼＝天照大神論を要約すると次のようになる。つまり、壱与は台与である。台与はトヨと読む。台与は万幡豊秋津師比売で、先代は天照大神であり、卑弥呼である。天の岩屋戸事件は天照大神の死を意味する。これは卑弥呼の死の反映で、卑弥呼の崩年とされる二四七年と二四八年に北九州で皆既日食が起きた。岩屋戸事件は日食神話であり、卑弥呼の死と一致する。実年代がはっきりしている用明天皇以降の天皇一代の平均在位年数は一〇～一四である。この平均在位年数を用いると、用明から三五代前の天照大神は卑弥呼の時代に重なる。

○ところが、この平均在位年数というのが曲者で、時代を遡るにつれて平均在位年数は短くなる傾向があるというが、本当にそうか。一～四世紀の平均在位年数は全世界的に約一〇年、五～八世紀は約一二年というが、本当にそうか。

○安本美典の一～四世紀平均約一〇年は、継承関係が世襲による王朝の年代を推定するのに、世襲制でない「ローマ皇帝」の在位年数をデーターに取り入れて平均在位年数を短く計算したり、平均在位年数の長い「東洋の王」の一部を除外したりした結果得られた数字である。ユリウス朝以外の「ローマ皇帝」を除外すれば、それだけでも一～四世紀の世界の王の平均在位年数は一四・九九年になる。この数字を使って天照大神の活動期を安本式に推定すれば、天照大神は一世紀中頃の人物となり、卑弥呼＝天照大神論は成立しない。

○するとどうなるか。九州の考古学者の多数が支持する邪馬台国東遷論は、安本理論から誘導されたものである。すなわち、天照大神が二二〇～二五〇年なら、五代後の神武は二七〇～三〇〇年で、そのころ神武が東遷したのだから、卑弥呼の死後邪馬台国は東遷したことになる。それが、天照大神が一世紀の人となると、この東遷論は理論的根拠を失うことになる。

○また、卑弥呼の崩年とされる二四七年の皆既日食は、福岡では日没のため見ることが出来ない。二四八年の皆既日食は日の出前で見ることが出来ない。従って岩屋戸事件は日食神話だとか、卑弥呼の死と一致するなどということは出来ない。

○皆既日食といえば、前二〇六年に韓国の大伽耶で見ることができた。すると、ここから面白いことがいえそうである。兼川さんが訳された尹錫曉『伽耶国と倭地』に「伽耶の胎動期は前三世紀～前一世紀」とある。また、同訳の李鐘恒『韓半島からきた倭国』に「大伽耶の始祖は伊珍阿鼓」とあり、それはイザナギではないかといわれている。もし、それがイザナギならば、伽耶の胎動期にイザナギの子のアマテラスがいて、彼らが不思議な皆既日食を見た。その記憶が岩屋戸事件の日食神話として語られていると考えられる。

○松中幹事の発表後、第十五回定期総会が開かれました。二〇〇三年度事業報告。同会計報告。同会計監査報告承認。役員改選と担当幹事発表（一六頁参照）。二〇〇四年度の事業計画案審議可決。同予算案審議可決。六月二十日現在、会員数一一三名。

神功から倭王讃まで

兼川　晋

『日本書紀』応神紀三年はこう書いている。

「是歳、百済の辰斯王立ちて、貴国の天皇のみために失礼し。故、紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木蒐宿禰を遣して、其の礼旡き状を嘖譲はしむ。是に由りて、百済国、辰斯王を殺して謝ひにき。紀角宿禰等、便に阿花を立てて王として帰れり。」

これを見ると、是歳は、阿花王が王位に就いた年（三九二）である。応神三年は二七二年壬辰だから、干支二運を加えると三九二年になる。三九二年には、貴国の天皇は、温祚系百済の王位にあるものを失礼の廉で殺させ、王を交代させている。このようなことができる貴国の天皇とは誰なのだろうか。武内宿禰か、沸流系百済の王か。武内宿禰でないとすれば、この年には既に残国の兄王が貴国の天皇になっていたと考えねばならない。武内宿禰は一年足らずで政権の座を明け渡したことになる。

天皇の使者について見ると、紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木蒐宿禰は、一見、武内宿禰の臣下とも思えるが、それは宿禰の系譜に葛城・波多・許勢・蘇我・平群・木など九人の子供があげられているからである。しかし、この種の親子関係は主従の力関係を親子として見ただけで系譜としての信憑性はない。このとき百済に派遣された紀（木）宿禰・羽田（波多）宿禰・石川（蘇我）宿禰・木蒐（平群）宿禰も、武内宿禰の子供だったわけではない。彼らは貴国内の基肆郡木伊、怡土郡波多、三根郡葛木、早良郡平群の豪族だったろう。彼らは当然、武内宿禰の臣下でもあった。武内宿禰が貴国から逃げていったとき、豪族の一部は宿禰とともに大和に落ちていったが、貴国に残って新しい沸流系の王に仕える者も少なくなかった。そのように考えると、三九二年の段階で、沸流系百済の兄王は、すでに玉垂宮に乗り込んで来ていたが、まだ倭王を名乗っていなかっただけであるとも考えることができる。

「貴国に礼旡し」という書き方は応神紀八年にもある。

「春三月に、百済人来朝り。百済記に云へらく、阿花王、立ちて貴国に礼旡し、故に、我が枕彌多礼、及び峴南・支侵・谷那・東韓の地を奪はれぬ。是を以て、王子直支を天朝に遣して、先王の好を脩むといへり。」

このことから考えて、これは『百済記』の書き方である。つまり、三世紀の卑弥呼時代は倭国であったのに、北部九州にある同じような国を貴国と認識したのは温祚系百済なのだ。いつの段階での認識かというと三六四年以来の認識である。そして、この認識は応神三年（三九二）、八年（三九七）まで続いている。

高句麗はこの時、貴国を何と認識していたかというと、これは引き続き倭と認識していた。同時代に建てられた好太王碑には次の碑文が刻まれている。

「百残新羅旧是属民、由来朝貢而倭以辛卯年來。渡海破百残随破新羅以為臣民。」

辛卯の年は三九一年である。それ以来、倭が来て、海を渡って百残を破り、随いて新羅を破り、以て臣民と為す、と書いている。紀宿禰たちが来て辰斯王を責め、阿花王を立てたのは三九二年である。これは百済の秩序を踏み破る行為であった。

また、新羅に対しても倭は同様の行為をした。『三国遺事』に次の記事がある。

「第十七那密王即位三十六年庚寅、倭王遣使来朝曰、寡君聞大王之神聖、使臣等以告百済之罪於大王也。願大王遣一王子表誠心於寡君也」

那密王の即位三十六年庚寅、

倭王が遣使来朝していうには、「寡君、大王之神聖なるを聞き臣等をして以て百済之罪を大王に告げしむ也。願くば大王、一王子を遣して寡君に誠心を表すことを願うもの也」と。平たく言えば人質を要求しているのであるが、百済の罪というのが辰斯王が侵した罪、責められても当然の罪を指すのであれば、三十六年庚寅（三九〇）は三十八年壬辰（三九二）でないと辻褄が合わない。倭が来て、百済の罪を知らせ、新羅も人質をだすようにと言ったのが壬辰の年であれば、これは好太王碑文を裏付ける具体例といえるだろう。

貴国は北部九州の基肆郡周辺を主領域にする国であったが、それを三六四年以来貴国と呼んだのは温祚系百済であった。当初から基肆国を貴国と表記したかどうかは判らない。しかし、やがて三九〇年三月以降の或る年以来、沸流系百済の王が基肆国の実権を握るや、弟筋に当たる温祚系百済が基肆国を素直に貴国と表記するようになったことは充分考えられる。

また、沸流系百済の王が南韓から北部九州に居を移すに当たり、温祚系百済の王に南韓の支配を任せたことも考えられる。この事実を反映した記事が神功五二年（三七二）の次の記事かも知れない。温祚系百済の近肖古王が、孫に向かってこういったという。

「今我が通ふ所の、海の東の貴国は、是天の啓きたまふ所なり。是を以て、天恩を垂れて、海の西を割きて我に賜へり。是に由りて、国の基永に固し。汝当善く和好を脩め、土物を聚斂めて、奉貢ること絶えずは、死ぬと雖も何の恨みかあらむ」

これは、神功紀を年代順に読み進んできた者には、いかにも（己巳＝三六九年）の倭と百済の共同作戦の結果、獲得した新領地である南蛮忱彌多禮や比利以下の四邑、いわゆる「海の西」を倭が百済に授与したことを指しているようにも解釈できる。

しかし、それでは、いくら共同作戦の戦果とはいえ、国交を結ぶやいなや百済は倭に出兵を要請し、その結果として獲得した新領地の大半を倭は惜しげもなく百済にくれてやったことになる。『任那興亡史』にある末松（保和）説の日本・百済国交樹立譚は『書紀』の造作だろう。倭と百済の共同作戦というのは、実は沸流系百済と温祚系百済の共同作戦だったのではなかろうか。その実体は壬午の年（三八二）に神功の指揮下で沙至比跪がした南韓六国平定のあとを、もう一度兄弟百済が平定し直したと考えてみる必要がある。

「加羅の国王の妹既殿至、大倭に向きて啓して云さく、天皇、沙至比跪を遣して、新羅を討たしめたまふ。而るを新羅の美女を納りて、捨てて討たず。反りて我が国を滅す。兄弟・人民、皆為流沈へぬ。憂へ思ふにえ任びず。故、以て来り啓す、とまうす。天皇、大きに怒りたまひて、即ち木羅斤資を遣して、兵衆を領ゐて加羅に来集ひて、其の社稷を復したまふといふ。」

沙至比跪を新羅に派遣したのは壬午（三八二）であるから、この天皇は神功である。沙至比跪はしかし、新羅を討たずに加羅を討った。これがいわゆる神功の三韓征伐だろう。本稿では南韓六国の平定としている。それで加羅国王の妹既殿至が天皇に泣きついてきたが、この天皇は沸流系百済の天皇である。なぜならば、天皇は怒って木羅斤資を使わして加羅の社稷を回復させた。その木羅斤資は百済の武将だからである。

すると、その結果、南韓を失った神功・武内系貴国は衰弱し南韓を掌中にした沸流系百済はやがて貴国まで呑み込むことになる。即ち、沸流系百済は南韓と北部九州を手に入れたから、南蛮忱彌多禮や比利以下の四邑は不要になった。そこで温祚系百済はいわゆる「海の西」を沸流系百済から任されるのである。これは近肖古王の時代の話

ではなく、少なくとも近仇首王以後のことである。こうして、そのかわりに負わされたのが対高句麗防衛の義務であった。

『高良記』第一一条にはそれが書かれている。

「大并、クタラヲ、メシクスルカウ人トウ クタラ氏ニ、犬ノ面ヲキセ、犬ノ スカタヲツクッテ、三ノカラクニノ皇ハ、日本ノ犬トナッテ、本朝ノ御門ヲマフリタテマツルヨシ、毎年正月十五日ニ是ヲツトム、犬ノマイ 今ニタエス、年中行事六十余ケトノ其一ナリ」

意味は「高良大菩薩は百済を降人の頭とし、その百済氏に狛犬の面を着せ、狛犬の格好をさせて、百済、新羅、伽耶の王は日本の番犬となってこの国の朝廷を守り奉るという狛犬の舞を毎年正月十五日に勤めることが今も続いている。これは年中行事六十いくつかの中の第一の行事である」というわけである。

それで、「海の西」を任された当初はよかった。しかし、次第に時間がたつと、貴国への忠誠心は薄れてくる。『書紀』が「貴国に礼无し」と書いたのは、尋常一様の無礼の意味ではない。弟筋が兄筋に尽くすべき忠誠心の欠如を指していたのである。

とすれば、やはり貴国は三九〇年三月以降、一年足らずで、その実体は沸流系百済になっていたのである。高句麗はそれを知っていたから、碑文には辛卯（三九一）の時点で温祚系百済を百残と表記し、沸流系百済を残国と書いたのである。辛卯の年以来、倭（貴）が来て、新羅・百残に勝手な真似をするので、高句麗は永楽六年（三九六）、その倭の本国である残国を叩いて弟王らを捕虜にして帰った。碑文の文脈は、ここに至ってはじめて完璧に納得できるのである。

すると、残国の兄王としては自分の留守に五五城を陥落させ、弟王や重臣たちを捕獲し去った高句麗を黙視するわけにはいかなかった。永楽六年以降の高句麗と貴国は、引くに引かれぬ対決を強いられることになる。

戦闘は永楽九年（三九九）、十年（四〇〇）、十四年（四〇四）と続く。この中で高句麗は、戦闘の相手を遂に残国から倭に改めていることが碑文から読みとれる。貴国を乗っ取った沸流系百済が、遂に自ら倭を名乗るに至ったのだろう。

『梁書』によれば「安帝（三九六～四一八）の時、倭王賛有り」とあり、その讃は時の温祚系百済の直支王（四〇五～四二〇）から即位の祝いに新斉都媛を贈られている。永楽六年以来、八年にわたった高句麗との戦闘はついに休戦に至り、多分、四〇六年くらいが讃の即位なのではあるまいか。直支は阿花王（三九二～四〇五）が一時高句麗に靡いたとき、それを倭に咎められて領地を没収され、人質に出された。人質時代に讃とは顔なじみの仲である。新斉都媛は直支の妹で、倭の五王と百済の接近した付き合いはこの時から始まる。

やがて好太王も四一二年には薨じた。

最後に、仲哀以後の九州の主権者を列記して年代を確認しておこう。

仲哀の崩年は三六二年壬戌である。その後、三六四年甲午以前に神功皇后（タラシ姫）が建国宣言して、斯摩宿禰を卓淳国に遣使する。三六六年丙寅、熊襲の桜桃沈輪が反乱。三六七年丁卯、熊襲討伐の勅命で武内宿祢南下。三六八年戊辰、桜桃沈輪平定。三六九年己巳、玉垂宮造営。基肆国（貴国）の主権者はタラシ姫（神功皇后）だった。

その後、タラシ姫は三八二年壬午に、葛城沙至比跪を派遣して新羅を討たせるが、沙至比跪は新羅を討たずに加羅を伐つ。加羅国王の妹・既殿至は、残国（沸流系百済）の兄王に愁訴する。兄王は温祚系百済と共同して、比自体、南加羅、喙国、阿羅、多羅、卓淳、加羅など東韓七国を平定して、加羅国王に加羅を返してやる。兄弟百済の東韓平定は倭・済連合作戦として

『書紀』が三六九年己巳に載せているが、この前後の倭・済国交樹立に関する物語は『書紀』の造作だろう。タラシヒメの倭が母国の多羅を撃つはずはないからである。辻褄が合うのは前後数年間に限られていて、長期間をとって考えてみると、矛盾が見えてくる。

兄弟百済の東韓七国平定は三八二年壬午以後である。三九〇年庚寅直後の可能性がもっとも高い。『吉山旧記』によれば初代玉垂命（＝神功）は三九〇年三月に薨去とある。二代玉垂命になるのは武内宿禰である。この時期にかけて兄弟百済が東韓七国を平定したとすれば、東韓の故地を失った危機感から武内宿禰は基肆国をすてて大和に逃亡したと考えられる。残国（＝沸流系百済）の兄王は基肆国に進出して、南韓の旧地は百残（＝温祚系百済）の辰斯王に任せる。任せられた辰斯王は高句麗に対する防衛の任を怠る。三九二年壬辰、辰斯王は責任を問われ、兄王は代わって阿花王を立てる。兄王が派遣したのは紀角宿禰たちで、この時点では残国の兄王はすでに基肆国（貴国）に来ているはずである。この事件が高句麗の残国掃討の発端になり、三九六年丙申、高句麗は残国五五城を掃討するが兄王を捉えることはできなかった。百残の阿花王は高句麗に抵抗しようとして逆に降伏する。このことで阿花王は領地を没収され、直支王子を人質に贈ることになる。阿花王が四〇五年乙巳に薨じて直支が温祚系百済を嗣ぐ。直支王は妹を倭王讃に贈る。倭王讃は残国王の後継者で、即位して倭王を自称する。讃の即位は四〇六年丙午が考えられる。以後、百済は倭王の即位毎に何かを贈っている。珍には池津姫を、興には泰始四年（四六八）に七支刀を、継体には五〇三年癸未に人物画像鏡を、欽明には仏教を。神功、武内宿禰、残国兄王、讃・珍・済・興・武、そして継体・欽明と九州の主権者はつづくのである。

「淡海」は「古遠賀湖」か（Ⅲ）

大芝「倭＝筑豊」説を追って

淡海を探す

庄司　圭次

⑤　岡には倭国の神宝、剣が祭られていた

イ、岡の地を守る剣山、剣神社

前記したように古遠賀湖の最奥部に、伊邪那岐命が生を終えた多賀があります。その南東三五ｋｍに天忍穂耳尊の降臨した彦山（標高一二〇〇ｍ）、多賀の西四・八ｋｍに宗像大神が降臨した六ヶ岳（同三三八ｍ）があり、そして多賀の南西一〇ｋｍに瓊饒速日尊の降臨した笠置山（同四二五ｍ）があります。これら神々の前面、多賀の北西五・四ｋｍ、古遠賀湖のドンツキに剣岳（同一二五ｍ）があります（図1参照）。この山は物部氏の兵仗を祭る所と云われ、筑前国続風土記には「この山、鞍手郡の中央に在り、唯一つある故に中山とも云う。山上に剣大明神の社あり。故に剣岳と号す社は巽に向かえり。凡此辺に剣大明神（倉師大明神）を祭る社八社あり。社は中山、新入、龍徳、新北、新延、下木月、遠賀郡の本城に在り。」と記されています。

これに記されているように、この剣岳を中心として、古遠賀湖を取り囲むように剣神社、八剣神社があります。先ず、この山の山頂に剣神社（一八二九年の台風で倒壊した為、古物神社【図1参照】のある所に遷座、八幡大神、剣大明神の二つの神社として祭られた。明治の神社令により神社名は一つにしなければならないとうことで、剣が降った地という古事にならい古物神社と名を改めた、と伊藤常足宮司にお聞きしました。）、西麓に熱田神社（熱田神社は文治元年に勧請されていますが、その前の名前・祭神を、金川宮司にお尋ねしたところ、その前は

新北郷の惣社として郷の本を司る剣神社であった、と説明されました。)、六が岳の東麓下新入の亀丘に剣神社（創建時は六ヶ岳の東嶺の天上岳にあったが、後世二度遷座し現在地に移った)、そして古遠賀湖西岸の新延、木月に二社の剣神社があり、更に八剣神社が「古洞海湖」の水路が狭まる江川の入り口にその水路を扼するように二社、「古遠賀湖」岡の津の南に三社、そしてこの剣山に一社あります。図1で●で印しているのが剣神、八剣神社です。

この剣山と剣神社、八剣神社を俯瞰して見ますと、これは、剣山、剣神社、八剣神社が、あたかも倭国創生の神々を守るかのように、剣山が神々の最前面に立ち、剣を立てて屹立し、そして剣神社、八剣神社が古遠賀湖を囲繞、この岡の地を監視しているかの如く見えます。

又この剣大明神である倉師大明神は、記の記す、神武天皇が山越えの行軍の時「命にはかに惑えまし、御軍も皆惑えて、伏しき」と、困難な状態に陥った時、彼等を剣を持って救いだした高倉下とも重なって見えます。

ロ、神宝剣盗難事件の語るもの

天智紀六六八年の項に神宝の剣が盗まれたという記述があります。「この年、沙門道行が草薙剣を盗んで、新羅に逃げた。しかし途中で風雨にあって、道に迷いまた戻った。」というものです。神宝が盗まれたというのに、なんと淡白な記述でしょうか。まるで他人ごとのような記述です。しかし、近畿天皇家が王権のしるしとしての神宝を手に入れ、東アジアに日本国の創建を宣言したのは、六九七年ですから、これは当然の事です。書紀はこの剣が天智達のものではないことを、正直に語っています。とすると、この草薙剣は倭国の剣、神宝だったのです。

この岡の地には盗難にあった剣に関し二つの伝承が遺されています。

i　剣奪回の伝承

古物神社（図1参照）の剣神社縁起（福岡県神社誌）に「天智天皇御世、僧道行熱田神剣を盗み、新羅に至らんとせし際、剣忽ち封裏を斬り破り、空に升りて去り、筑前の古門に及る。剣は地に墜ちて光耀を数里に放つ。土人驚き、近くにて之を視、則ち剣也。皆神物為りを知る。瀆し狎どりてはならずと、皆で議り、小さき祠を構りてこれを納む。朝廷この事を聞きて其は草薙為りと官吏を遣わし烝め熱田に復す。是を以て剣墜ちる所の地と称す、蓋し剣空より降也、以て、降物と曰う也。今古門というは訛也。」

神霊で、剣が空に上り、飛んで、この岡の地の古門に帰ってきたとしています。この古門は図1の古物神社のある所で、玉生津の南一・五ｋｍにあり、仲哀天皇、神功皇后が熊襲征伐の時、この古門で熊襲征伐の最後の準備をする為に行在所を置いた所です。神功達は、ここを発向して、白山峯を越え、香椎に向かっています。ここは岡の地からの出口であり、古代陸路の要路なのです。神功にあやかる為に、豊臣秀吉もこの古門から発向しています。

この伝承は、神霊を使っての表現とは云え具体的です。封裏を斬り破る、剣が空に舞う、墜ちて突き刺さる、刃が耀き、光を数里に放つ、是は激しい戦闘を表しているのではないでしょうか。この岡の地の陸路の出口、古門で非常線を張っていた倭国軍の網にかかった新羅の窃盗団との熾烈な戦いを語っていると見るときこの神霊に擬した現象がリアルに見えます。それは神宝を奪った者、倭国の国威を損なおうとした者に対して倭国兵が激しい怒りを露わにした戦いですから酸鼻を極めたものだったでしょう。村人達も協力して奪還に成功し、神宝は朝廷に献上され、朝廷か

ら古門という地名を賜った。この伝承が古門という岡の地からの出口、要路で語られているところに整合性を持ち、説得力があり、この伝承の信憑性が感じられます。

神宝の剣がこの岡の地の陸路の出口、古門で奪回されたのです。

ii　神宝の剣のレプリカの製作の伝承

芦屋町の吉木にある高倉神社の社伝に「天皇が道行のごとき者が又剣を盗むことがあるかもしれない、と心配されて、鍛工に命じてこの剣と同じ剣七振を作らせ、八本の剣として納めさせた。当社もこの剣を置いたので暫くの間、八剣宮と称した」と八剣宮の由緒を語っています。盗難を防止するために七本の剣を作り、八箇所に分散して保管し、保管したお宮を八剣宮と云うというのです。この岡の地に八剣宮を拾いますと、後世に勧請されたのを除いて、古洞海湖の塩谷、小敷に二つの八剣神社、古遠賀湖には中間の中底井野、水巻町の立屋敷、遠賀町広渡、鞍手町中山に四つの八剣神社、直方市の新入にある剣神社は社伝によれば一時八剣神社と呼ばれていたと伝えていますし、この高倉神社も八剣宮と称していますから、以上八箇所が八剣神社と呼ばれています。

全国に八剣神社は沢山あります。これは、七世紀末、近畿天皇家が神宝を手に入れ、日本国を立ち上げ、神宝の剣を熱田神社に保管したことから、当然の事として、全国の神社に熱田神社、熱田八剣大神が勧請され、その反映として、全国に、熱田神社、八剣神社が存在します。

しかしこの岡の地の八剣神社は、熱田八剣大神を勧請した八剣宮は一社（折尾、本城の八剣神社）だけで、あとは熱田神社とは無縁の八剣神社です。

八剣宮があるという事はそのどれかに神宝の剣が保管されているということになります。八剣宮の存在は神宝の剣の存在を傍証しています。

この岡の地は倭国の神宝の剣が保管され、祭られていたのです。

⑥　岡の地は倭国軍の拠点だった―伝承が語る岡

この岡の地には実に沢山の説話が伝えられています。その中でも、日本武尊と仲哀・神功の伝承は群を抜いています。日本武尊の伝承は、立屋敷、香月、福知、頓野、剣、浅木と「古遠賀湖」の東、南岸に、仲哀天皇・神功皇后の伝承は、岡水門、芦屋、埴生、虫生津、白山など「古遠賀湖」の北、西岸に、地名説話を中心に多くの伝承が伝えられています。（遠賀郡誌、鞍手郡誌）それらの伝承の中で特に注目すべきものは、この岡の地に行在所を置き、軍事を謀り、そして、この地で兵器を調達し、兵を訓練し、戦捷を祈願するなど、軍団が戦いの準備をし、発向する地として描いています。そして戦闘後はこの地に帰って来て神々に戦捷の報告を行い、報賽しています。この岡の地は軍事拠点なのです。

イ、日本武尊の戦捷祈願と報賽

熱田神社社説によると「日本武尊熊襲征伐の時、新北の亀甲の名にめでさせ給い、此所にて口噛ぎ、司本峯の榊葉を取りて大麻とし天神地祇を祝祭し玉ふ。此所に地神五代の大神を合祭して戦捷を祈らせ給う。後熊襲を征服し帰途の際この社に立寄らせ給いて報賽を御祭盛に行わせ給い」と剣山の麓にある熱田神社で戦捷を祈願し、熊襲征伐後はこの社で報賽を行っています。

又新延にある剣神社の社説では「日本武尊熊襲及び西国の賊を征伐せんが為御通行の時当所に行在所を経営し軍事を謀らせ給ふ。」とここに行在所を設け、軍略を練っています。

ロ、仲哀天皇、神功皇后の熊襲征伐の準備

「古伝の説に曰く、仲哀天皇、皇后、御舟より上らせ玉ひ、芦屋にしばらくとどまりおはしまして、諸軍に命じ兵器をたんれんし、弓矢を調で玉う。そこを名づけて矢はぎという。芦屋より一里ばかり西の海辺にあり、此度西国に下らせ玉うは、熊襲征伐のためなれば、敵国猶遠しと云えども、専ら行伍を正しくし、号令を厳にしたまう、よって先、初めて御旗をはらせ玉ひしところを旗の浦という。以下略」（八幡本紀）と準備を整え、岡湊より乗船し、玉生津に上陸、古門村を行在所とし、これより発向して陸路を白山嶺を越え四郎丸、笠松を経て見坂峯を越えて香椎宮に向かっています。

ハ、神功皇后の三韓征伐の戦捷報告―鳥見山、住吉神社の鎮座起源の伝承

「神功皇后征韓凱旋し、筑紫の蚊田（今の宇美）で誉田皇子を出産した後、東帰の際に、崗の津に着き、この丘陵に上り、海上に飛びかう水鳥をながめたので、後に鳥見山と称した。この時皇后は群臣を集めて、『此度三韓を容易に従えさせたのはこの三神の恩頼である、かた時も忘れてはならない』と御手づから一株の松を植えさせ、そのもとは白い幣をおさめ、『此の松は神の御影と共に弥栄えに栄えよ』と誓わせた。そして此所を若松と称え、住吉の三神を斎き祀った」と報賽を行っています。住吉神社は今は鳥見山（標高二三mの小山）の下にありますが、以前は山上に西に向いて建てられていたと伝えられています。

ニ、斉明天皇の伝承

紀は対唐・新羅戦の直前、戦争の情勢が大変緊張している時に、天皇が「筑紫に幸して種々の武器を準備した。」と記し、そして七年の三月の条に「御船還りて娜の大津に至る。岩瀬の行宮に居ます。天皇、此れを改めて、名をば長津と曰ふ」と記し、戦争の準備をしてこの岡の地の岩瀬（現在中間市に大字岩瀬があった）の行宮に入り、この行宮の名を「岩瀬の宮」から「長津の宮」に変えて、ここで戦争の指揮をする態勢を取っています。

遠賀の伝承には、天皇の戦争に関する伝承はありませんが、この磐瀬（図1参照）のすぐ西の沖にあり、島であった「木守」「浅木」「底井野」の地名は斉明天皇が付けた（④のハで一部記す）という伝承があります。筑前国続風土記は「上座郡の朝倉へ通玉う道筋なれば、磐瀬の行宮は、則ち此の所の事なるべし。此の村と仲間村との間に御舘という田の字あり。是行宮の有りし所にや、今は仲間村に続せり。又此の所は昔の駅亭なりし由、延喜式に見えたり。」と述べています。

磐瀬については、筑紫の那珂説とこの遠賀説があるようですが、戦争情勢が緊張している時に、倭国の王であり、最高指揮官が防衛ラインの水城の更に北に出て、何の防衛ラインも無い博多湾に面して行宮を建てるだろうかと筑紫の那珂説に疑問が残ります。その点遠賀の磐瀬は後方にあり、天然の要害にも囲まれ、白村江の戦いに派遣した倭国の水軍の千隻もこの広い「古遠賀湖」なら充分に擁する事ができ、太宰府にも朝倉の宮にもまっすぐ陸路が通っていますし戦争指揮をするにはふさわしい所です。

仮にそうだとすると、天智天皇も七年七月に斉明天皇が崩御した後「皇太子・・称制す」として即位せずに政務をとり「長津の宮に遷り居します。稍に水表の軍政を聴めす」と記し、この長津の宮で戦争指揮をしていますから、白村江の戦いの倭国軍発向の地としてこの岡の地は伝えられている伝承のように倭国軍の一大根拠地だったことになります。

ホ、豊臣秀吉の伝承

「文禄元年（一五九二年）秀吉公朝鮮に軍勢を渡し玉ひける

時、此港に船をあつめて、渡海せらる。」筑前国続風土記

「鞍手の郡、四郎丸村の境内に白山嶺という所あり、白山権現鎮座し玉う。是神功皇后の通り玉ひし所と云う。此故に秀吉公朝鮮征伐の為肥前国名護屋におもむかせ玉ふ時も捷径ならざるに昔の吉例也としてわざと此峯を越えて通り玉ひしとかや」

（八幡本紀）

と、豊臣秀吉が朝鮮への侵攻を行う時も、わざわざこの岡の地に軍船を集結させ、この地を発向させています。そして自らも、神功の通った古門から白山嶺を越えて名護屋に向かったと記録しています。古文書は神功皇后の吉例に習ったとしていますが、それ以上に、倭国の時代、朝鮮海峡を支配していた倭国水軍の再来を願って、この栄光の海軍基地に軍船を集め発向させのではないでしょうか。

へ、古集の中の歌

この岡の地を発向し、船上で歌った歌が万葉集の古集の中にあります。

○ちはやぶる金の岬をすぎぬとも　われは忘れじ牡鹿の皇神

（万葉集巻七　一二三〇）

この「牡鹿」の読みについて、通説は「シカ」と読み、志賀島のこととしています。そして、博多湾を出港して、この金の岬を通過する時歌ったとしています。私は、この通説の解説に最初に接した時、志賀島を出て、金の岬を通って何処に行くのだろう、方向が逆だし、海路もあとは沿岸航路で安全なのに、どうしてこんな決意をするのだろうと何かトンチンカンな歌だと思っていました。しかし、吉田東吾氏はこの牡鹿の読みについて、通説は間違いだと次のように述べています。

「按にこの歌の牡鹿（おか）は諸家シカと訓みて、志賀海神に引きあてたり、然れども牡鹿の牡の字のそへてあるからにはヲカと訓むべきにあらずや」

当会の福永さんも同じ見解を論考で述べられています。

この歌は、作者の古集歌人が岡を発向し船上で歌ったものだったのです。

この歌は、万葉集の中でも古集の歌ですから、正に倭国の時代に、倭国人の認識で歌われた歌です。この作者は朝鮮半島へ倭国軍の一員として戦いに向かっているのか、或いは、中国、朝鮮半島への使者として赴いているのか、岡を舟で発向し、響灘から、鐘崎の海峡を越えて、いよいよ玄界灘の荒海に乗り入れる時、作者の使命達成に向けた、凛とした決意を、岡の神々に誓って歌ったと解する時、初めてリアルに読み取れます。

やはり岡は倭国軍や使者の発向する地だったのです。

「淡海」は「古遠賀湖」を指し示しました。この「古遠賀湖」を取り巻く岡の地は即ち「淡海」の地でした。では「岡」の地は古事記の語る「淡海」にふさわしい倭国中枢の重要な機能を有していたか、立地、地形から観察してきました。更に地域の遺称や伝称はそれを語っているか見てきました。その結果、この岡の地は古事記の示す「淡海」の地の示す要件を全て満たしていました。倭国の都、太宰府、朝倉、そして倭国の東朝と比定される田川・香春・行橋の一〇km～四〇kmの所にあり、正に都に隣接していましたし、又その地形は天然の要害により軍事基地として最良の条件を有し、更に、朝鮮海峡、玄界灘に面しており、海峡国家と云われた「天国」がこの海を支配するには格好の場所であることも示していました。

天然の要害に守られ、更に、後背地に穀倉地帯を持つこの「淡海＝岡」の地は、天神達に取っては垂涎の的だったのではないでしょうか。

だから天神は降臨の本部隊をこの二つの「淡海」を抱える岡の地に降臨させたのではないでしょうか。

つづく

伊勢と二見ヶ浦

灰塚　照明

八、実地踏査―御子守神社とその周辺

九、五瀬命・神倭伊波礼毘古命

古田武彦氏の研究過程を踏まえつつ、筑紫現地の調査から現在における私のアイディアを提起しておきたいと思う。

1、古田氏の研究過程

①『盗まれた神話』から

古田氏は第八章「神武の誕生」「神武と日向」において、

○この四人（神武兄弟　灰塚註）はどこで生まれたのだろう。それはわからない。

○「即ち日向より発して筑紫に行幸す。故、豊国の宇佐に到りし時……」とある。この「日向」は「筑紫の日向」ではない。明らかに「日向国」（宮崎県）だ。

○また神武の最初の妻も「日向の国」の人だ。（朝日文庫）

○「神武東征」の発進の地、およびその妻の出身地、そのいずれもその日向（国）は、宮崎県ではない。（朝日文庫）

とする。さらに同章「九州東岸の地名」では、

一つ、興味深いことがある。この神武の兄弟や子供たちの名前には日向の国から豊国、つまり九州東岸の「地名」がついている。―そういう形跡があるのだ。まず長兄「五瀬命」。これは今まで「イツセノ命」と読まれてきた。―略―ところが、宮崎県の地図を見よう。その北辺、大分県南辺近くに五ケ瀬川がある。（その上流に高千穂町、五ケ瀬町がある）。してみると、この長兄の名は「ゴカセノ命」と読みうることになろう。この五ケ瀬川と河口で合流しているのが祝子川であり、その岸に「佐野」がある。神武の幼名「狭野命」（神代紀、第十一段、第一一書）と音が一致する。―中略―

このように日向市の北辺、南辺を中心に豊前にかけての地名があるのだ。むろん、このような「地名比定」から考察をはじめることは危険だ。同音地名は各地に存在するのだから。しかし先のような神武の発進地、妻の故地を「日向国」とした場合、右のような地名との関連に目が注がれるのは自然であろう。（朝日文庫）

と、命名の由来については、断定を避ける慎重な姿勢を堅持された。

だが、古田氏は、「神武の発進地―宮崎県日向国説」というそれまでの自説を敢然と捨て、あらたに、神武紀の歌謡（一一～一五番）、氏の云う「久米歌」等を根拠にして、「福岡県・志摩郡久米周辺説」つまり神武の座標軸転換を発表されたのは、一九九一年八月五日白樺湖におけるシンポジウムでのことであった（『「邪馬台国」徹底論争』第二巻　新泉社）

その内容は翌九二年六月出版の『神武歌謡は生きかえった』I「神武東行」の発進地はどこか（新泉社）に譲る。

②『神武歌謡は生きかえった』から

ここで考えたいのは、II古田武彦、研究と主要テーマを語るの一節―吉備からの武装侵略―のうち、五瀬命にかかわる対談である。

それを次に引用する。

―五ケ瀬命は日向の方からきたのではないのですか。

その点、私は宮崎県を出発と思っていました、五ケ瀬川が流れているので、五瀬命と呼んでいるのは五瀬命と呼ぶのだろうと考えたわけです。ところが今回のようになりますと、い

わゆる五ヶ瀬川とは必ずしも結びつける必要はないということになります。わかりませんけど。

こういうアイディアを出した方がいらっしゃるのです。あれは、イセと呼ぶんじゃないですかと。伊勢の海というイセ、伊勢の海が糸島郡にあったのですがね。伊勢ヶ浦、大石という字があるのですが、イセと読むんじゃないかと言われましたよ。そうかもしれないけども、そこはそうとは言えないということですね。

もちろん五ヶ瀬川はまったく無関係とも断じられないわけで、たとえば母親のいた場所であった。そこで五ヶ瀬命という可能性もあるわけです。

これは決められませんね。―以下略―

ここでも古田氏は慎重である。

この時点でいまだ、

○神武の父、葺不合命が姨・玉依姫を娶った場所、住んだ場所は不明

○五瀬命ら兄弟四人の生育地も不明

○神武の妻の故地は宮崎県・日向国

という認識に立てば当然といえよう。

2．私のアイディア

「仮説は大胆に、論証は緻密に」という古田氏の言葉がある。

筑紫在住のアマチュアの一人として、「論証の緻密さ」にはほど遠いけれど、

○飯石神社（御食入沼命）、産宮神社（奈留多姫命）、御子守神社（玉依姫命）の祭神が母子関係にあること

○右三社の位置が近いこと

○御子守神社の所在地名「字・御子守」と、「御子休め石」（境内）の伝承

から、

○葺不合命の生育地と、姨・玉依姫を娶った場所

○五瀬命以下五子の生育地は御子守神社の可能性大、という大胆な仮説を提示した。（ニュース一一二号参照）

これを前提として更に論を試みれば、五瀬命・神倭伊波礼毘古の命名は怡土郡・志摩郡内の地名との関連に強く注目するのである。

①五瀬命

古田氏の「ゴカセノミコトと読みうることとなろう」には、「五ヶ瀬町」や「五ヶ瀬川」の名称から半ば肯定しながらも、葺不合命の時代に「五」を「ゴ」と読んだであろうかと、半ば疑いを消し得なかった。

ところが前掲「対談」に見るごとく、「イセノミコトと呼ぶのではないか」というアイディアがある。「理」のある素晴らしい提言、と思う。

もっとも古い数詞は、ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、コ、トである。すでにご承知のことであるが、『古事記』に、

五百津之美須麻流之球（いほつのみすまるのたま）　五百鉤（いほはり）

五百入之靫（いほりのゆき）　五百原君（いほはらのきみ）

『記』以外では

五十猛命（いたけるのみこと）　五十鈴川（いすず）　五十君（いきみ）

五十子（いかこ）　五十嵐（いがらし）　五十公（いきみ）

などその例は多い。「五」はほかに「イツツ」「ゴ」と読むこともちろんである。

「五瀬」の地名調査

九四（平成六）年前後「数詞十瀬」の地名を探し求めた。むろん、目的は筑紫の国（筑前・筑後）のどこかに「五瀬」はないか、である。

一ノ瀬または一瀬は筑前に二カ所（那珂郡遠賀郡）筑後（浮羽郡）に一カ所。

二瀬（ふたせ）は筑前（穂波郡）一カ所

以上四カ所はすべて河川に沿う。

三瀬（みつせ）峠は福岡・佐賀の県境一カ所、山間部である。それまでで四瀬、五瀬は見当たらない。

筑前の海図も見たが、ない。

志賀島には「神瀬」と総称する七つの瀬があるというが、四瀬、五瀬は特定できない。

無駄骨だったと思うが、調査

したことに意義があろう。

②神倭伊波礼毘古（神武天皇）

『福岡県神社誌』中巻（九一～九二頁）に

村社　熊野神社

糸島郡可也（かや）村大字小金丸字町　在　祭神　伊弉冊命

事解男命　速玉男命

がある。由緒では鎮座年月不詳、口碑によれば、怡土郡高祖城主原田の裔小金丸九郎の神妙戒尼の勧請とある。古代史研究の対象外と思ったが、その末社群一一社の中には容易ならぬ神社が目に付く。

大上戸神社（手力男命）

瀬知（せしり）神社（木花咲耶姫　瀬知翁）もと印鑰（いんやく）社灰塚註

可也神社（神倭磐余彦命）

などがそれである。ここでは可也神社について述べてみる。

『筑前国続風土記』小金丸村可也山の北の麓にあり。村俗云伝ふるは、民家の後に、熊野権現異国より渡り玉ふ時、御腰を掛て休ませ給ひたりとて、横三尺、縦四尺許なる石あり。底には深く入たりといへり。此石をはたうとひて人にはふませず、又此時旗を立給ひし所とて、此村の内小山のふもとに旗山と云所あり。又熊野権現の御船の先乗して、瀬ふみせし神とて、瀬知と名つけたる小き叢祠あり。よってひそかに思ふに、役行者私記に、熊野権現は神武天皇なりとあり、神武帝熊野に入給ふ事、及剣を天照大神より授り給ふと、神武帝の夢に見玉ふ事、日本紀に見えたり。仏者の熊野権現は天竺より来り給ふといふも、神武帝は日向より上り給ふ故、日向も天竺も西の方なれば、似たる事を取り合せて称する也。

此村民の伝説も、是によるなるへし。又三国伝記に、熊野権現天竺より来り玉はむとて、先剣をなけ玉ふ。其剣のとゝまる所、熊野の神蔵（かんのくら）と云所也と見えたり。かくその事跡似たる事多ければ、熊野権現は則、神武帝ならんか。又熊野権現の使をは、烏なりと云ふ。神武帝熊野に入んとし玉ひしに、烏の先に飛ひたりし事、日本紀に見えたれば、是又有事也。然れは此所は則、神武帝日向よりのほらせ給ふ時に、御休息ありし地なるにや。此地日向より上方へのほり玉ふ順路にあらすといへとも、神武帝日向より豊前を経て、筑前岡の湊に来り給ふ事、旧事記に載せたれは、爰にも来り玉ふなるへし。村中にも熊野権現の社あり・今村民のいひ伝ふるにまかせて、みたりに鄙意を述へ侍へる。―以下略―（五二五～五二六頁）

筑前国各地に残る「九州年号」を偽年号と断じ、「白鳳」以外のすべてを斥け、また各地の伝承にも峻厳な貝原益軒であるが、ここでは珍しくも現地伝承を重視、採録しているのである。

○熊野権現は神武帝ならんか。

○神武帝日向よりのぼらせ給ふ時に、御休息ありし地なるにや……ここにも来り玉ふなるへし。

としながら、

○今村民のいひ伝ふるにまかせて、みだりに鄙意を述へ侍へる。

と、伝承と学問の狭間に揺れる益軒の心をかいま見るのである。

『同　付録』『同　拾遺』ではこれを採録しない。それを伝承の「軽視」とすべきか、はたまた「慎重」と評すべきであろうか。

現地調査

九一（平成三）年一一月九日午前、古田氏と可也山（三五六㍍）を訪れた。同行は九州の会・代表幹事・兼川晋氏、鬼塚敬二郎氏と私の三人。

約四十分で山頂近くの可也神社に到着。わずかばかりの平坦地北部には約四十平方㍍の二段石垣の小さな社殿が建つ。揃って参拝。

木製の説明板には次の墨書が

あった。

可也神社

主神は神倭磐余彦命

八咫烏や金鵄の助けを受けて、悪者どもを退治し大和で第一代の天皇の位につかれた方です。

日向（宮崎）から大和へ向かわれる途中岡田宮（遠賀）においでになった時にここにお登りになって国見をなさったのでしょう。社前の大石がお腰掛岩、次のが国見岩です。

志摩で一番高いところにいて可也のさとを守ってくださるので皆みなこの社を大切にし、紀元二千六百年（一九四〇）の頃に小学生まで石や砂をはこび村をあげて社殿を造りまた国の安全と武運の長久を祈りました。

相殿の一柱は木花開耶媛命

相殿のもう一柱は倉稲魂命

五〇㍍ほど進み山頂に立つ。絶景！　まさに絶景！　思わずあがる歓声。秋晴れの夕暮れ時、北西の彼方に壱岐・対馬が見えるという。逆光の利用である。

眼下に玄海と志摩の美しい海岸線。

縄文海進の最大時、数個の島に分かれていたであろう志摩の地形を実感する。足元を見れば不思議なことに、山頂部に限り土の色が異常に赤い。特に鉄分を多く含有するのであろう。

北を望めば火山（二四四㍍）・彦山（二三二㍍）、この可也山とは南北一線上に連なる。彦山山頂にはニニギノ命の父・天忍穂耳命を祭る彦山（日子山）神社、研究テーマが伏在するかのようである。

ここ可也山は御子守神社の西北約八㎞に位置することを付け加えておく。

③命名の由来と地名

神倭伊波礼毘古命について、岩波古典文学大系『古事記　祝詞』一四七頁、頭注一六は、

神武天皇。大和に遷られてからの命名である―以下略―

角川文庫『新訂　古事記』（武田祐吉訳註、中村啓信補訂・解説）七四頁、脚注四は、

大和の国の磐余の地においでになったお方の意

とする。いずれも大和・磐余の地にちなむ命名とするが、果たしてそうであろうか。

平成元年四月初旬、ときあたかも佐賀県吉野ヶ里遺跡墳丘墓の中心部発掘を、今日か明日かと全国民が注目するなか、古田氏は前進待機かたがた福岡市内の某所に潜伏？滞在、『吉野ヶ里の秘密』（光文社）を執筆中であった。

八日の夜遅く電話があった。

「終わりました。一杯やりませんか」

珍しいことである。鬼塚敬二郎氏と三人でビールを傾けながら、四方山話に花が咲いた。いつしか平原・三雲南小路遺跡のことに及び、いきおい話は井原鑓溝遺跡へと進んだ。古田氏も私も同遺跡を、

「イハラ・ヤリミゾ」

という。すると鬼塚氏が、

「現地では、井原と書いてイワラ、井原山もイワラヤマといいます」と断言した。古田氏は、

「謎が解けました。イワラは「ワ」プラス「ラ」、「ラ」は地名接尾語ですね。巨石信仰に関係ある地名かもしれませんね」

と大喜び。

これが国家「君が代」解明の伏線となったことは『「君が代」は九州王朝の賛歌』（新泉社）に詳しい。このとき、

「接尾語のラは、レに転化しやすい。神武の倭名はイワレヒコ、もしかすると、イワラがイワレになったのでしょうか。神武は井原に関係ありますかね」

と、語りかけるとも独り言ともつかぬ古田氏の話に、鬼塚氏と私はその意味をはかりかね、ハァーとなまぬるい返事をしたように記憶する。

いま、それが極めて重大なヒントとしてよみがえる。

御子守神社のほぼ南一㎞に、

三雲南小路遺跡（弥生中期

後半)、
さらにその百㍍南が
井原鑓溝遺跡（弥生後期初頭）
で、いずれも江戸時代に発見された王墓として名高い。イワレヒコは、彼の生育地に近く由緒あるイワラにちなむ命名ではあるまいか。
一方、五瀬命は、
志摩郡桜井村の小字・伊勢
怡土郡松国村字伊勢浦
に因む命名で「イセノ命」と呼ばれたと考えたいのである。
つづく

スミノエカキ考

佐野　郁夫

＊原稿で古代史に関係の少ない部分は割愛させて頂きました。割愛した部分には、アメリカ・バージニア州のチェサピーク湾の水質浄化のために有明海の「スミノエ牡蠣」の種苗が放流されたこと。百科事典に載せられている「牡蠣」の説明。牡蠣の種類について。牡蠣の養殖について。縄文墨江牡蠣について。

四、二　古代墨江牡蠣

平成十三年九月二十日、午前、岩戸山古墳・弘化谷古墳・広川町古墳公園資料館と訪れ、入ってすぐの処に「スミノエカキ」が並べてある。かなり大きい。一緒に並べてある蛤の四、五倍もある。

平成十一年十一月に東京古田会ニュース第七〇号に「玉満の海神族と神来（おとと）の呉王支庶族と天孫族」で発表したが、その中で「スミノエカキ」は海神族の主食に近いものであり、墨江（住江）大神に海・陸の幸を祈り、スミノエカキを採取し、牡蠣より白玉を時々見出し玉垂れは海神族の重大なシンボルとなる。後代玉垂命の海神族が天孫族と婚姻などにより九州王朝を創建した。

その経緯は、浮羽郡の山北・寿見の江は縄文海進時代の海辺の隅の江であろう。また記紀で墨江が住吉と同じと伝えているが、現久留米市の住吉付近から平成十一年八月二十九日に訪れた三潴廟の塚付近（またその塚は牡蠣殻の真珠色が美しく輝き、弥生時代の高良玉垂命の塋（墓）域と推定）、田川・玉満は弥生時代まで牡蠣貝塚の多い地帯である。沢山の牡蠣から白玉がとれ、玉が満ち満ちたことを地名が物語っている。

城島町誌によれば、城島の古代遺跡、昭和五十六年、下青木・下林地区圃場整備事業中、地表下一、二㍍の水田から、弥生後期の住居跡が発掘された。……このあたりは「スミノエカキ」の群棲地で、巨大な牡蠣殻層下の潟地の中から、無傷の土器類が出土したことは奇異の感を抱かせたが、伝承に聞く天武の大山津波（六八七）に一瞬で埋まったため、柔らかい潟泥に保護され原形をとどめたのではなかろうか、とある。

なお、城島町下青木と久留米市住吉は約八㌔、下青木と三潴町高三潴や玉満は約七㌔。

また平成十三年九月二十日、午前訪れた広川町古墳公園資料館で見た大きな「スミノエカキ」は、後日十月六日、資料館の佐々木さんに問い合わせると、三潴町玉満の地下二㍍下から多く出る天武震災時のもので、それを提示した。なお古筑紫海は縄文時代から「スミノエカキ」をはぐくんでいたと考える、との返事であった。

五、おわりに

「スミノエカキ」は縄文時代、筑後川が千年川といった時代であろうか。古筑紫海の奥の海岸が今の浮羽郡・寿見の江付近、また南端の海岸が今の大牟田市隈付近・毛無貝塚辺りに巨大な海のミルクとして、大食糧原料として古筑紫海に散見する海神族を支えてきた。

海進が進むに随い弥生の海岸

線は久留米市付近まで下がってきた。しかし、海の幸たる「スミノエカキ」は墨江大神を祭る海神族の尊崇の原点として貴重な栄養源であった。

この頃であろうか。海神族と天孫族と婚姻などによる九州王朝の創建は。

これら縄文時代から弥生・古墳時代と連綿と現代まで古筑紫海・有明海に棲息してきた「スミノエカキ」は海水浄化能力をいつ頃から備えていたのであろうか。天性のものであろうか。「スミノエカキ」の原産地は渤海・黄海といわれている。黄濁した大河の海辺に棲息し続けた生物が棲息せんと進化し続けた結果体得したと考えられる。

北米・チェサピーク湾を浄化し、北米の人たちに愛される美味しい「スミノエカキ」を愛する一人として喜んでいるのは私だけではあるまい。この指とーまれと「スミノエカキ」を愛し感謝することしきりである。

（二〇〇四・六・一七）

図書紹介

【謡曲のなかの九州王朝】新庄智恵子著　新泉社

風土記のなかにも、万葉のなかにも九州王朝は語られていた。謡曲のなかにも語られていないはずはない。長年、古田史学に親しんだ著者が、その目で謡曲集二百番を読み終えたときの驚きは、記紀に描かれた古代史の常識をうち破るものだった。「鶴亀」で正月に参拝するのは橿日廟だろう。「官人、駕輿丁、御輿を早め」とは、天皇の輿がゆっくりカヨチョウまで来ると、輿を担いでいる官人たちが向きを南にとって、ここから足を速めたという。カヨチョウは橿日神宮の近くの地名。「淡路」は能古ノ島の旧名。そういえば能古にはイザナギ・イザナミの国生み神話が伝承されている。そして国生みは淡路島から始まったという。能古は島の旧名を、記紀に完全に奪われてしまったのだろう。　定価二〇〇〇円＋税

【古代文化を考える】第四五号　編集・東アジアの古代文化を考える会　二〇〇四年六月発行

中国・朝鮮をふくめて日本の古代史を見ようとする人には平井進・佃収・山中光一氏らの論考は有益だろう。定価一〇五〇円

【古代史最前線】第六号　編集・飯岡由紀雄

九州古代史の会会員も多数寄稿している。　一部売り五〇〇円

例会案内

九月例会は次の通り。

……

日時　九月一九日（日）
　　午後一時半～四時半
会場　早良市民センター３Ｆ
テーマ　新羅路・伽耶路を行く
発表　兼川晋幹事

……

韓半島の古代史を踏まえなければ列島の古代史は語れないというのが口癖の兼川さんが、東京・大阪の会員に依頼されて企画した夏休み韓国旅行の報告。

事務局便り

○今年は役員改選の年とあって健康上の理由で退任希望者が多く事務局は慌てましたが、最終的には監査の島田長男さん、お一人の退任で乗り切ることが出来ました。島田さんには「長い間ご苦労様でした」と申し上げます。皆さんの健康問題は担当替えで何とか留任をお願いし、新らしく木藤叶さんにも幹事になっていただきました。新しい役員名と担当は次の通りです。

代表幹事　高橋勝明
副代表幹事　相良祐二
常任幹事　事務局長　益田哲男
幹事　編集　兼川　晋
幹事　会計　恵内慧瑞子
幹事　資料　加茂孝子
幹事　見学会　片岡　格
幹事　編集　松中祐二
幹事　見学会　庄司圭次
幹事　H・P　上村正康
幹事　図書　木藤　叶
監査　淵江順三郎
監査　小松洋二